報 告

留学先としての西フロリダ大学に関する一考察

A Consideration of the Implementation of a Study Abroad Program with the University of West Florida

西　田　光　一
Koichi NISHIDA

abstract

This short essay is a report of what I did during my research travel to Florida in the late September 2024. It is explained why the University of West Florida is good for YPU students who are willing to study abroad in America. It is also proposed how to take advantage of one's study abroad experience to improve his/her language proficiency to the CEFR C1 level where they can enjoy leisure topics in a foreign language. My proposal is based on the findings from my pragmatic research on parody and cultural accommodation, and consists of three steps. First, express yourself poetically. Second, edit the words given by others. Third, tell your identity. These steps are designed to combine language proficiency with proactiveness, thereby contributing to nurturing Global Communicators, as stated in the new diploma policy of the Faculty of Intercultural Studies.

1. はじめに

本論は、言語研究を軸に、国際学会の発表と現地での学習環境の新規開拓を連動させた実績の報告であり、専門課程に必要な英語の統合的技能と海外の異文化に向かう行動力という2つの能力を有機的に結びつける1つの実践モデルを提案し、本学部の新しいディプロマポリシーに謳うグローバルコミュニケーターの育成に貢献することを目的とする。具体的には本学のアメリカでの新たな留学先として西フロリダ大学を紹介し、現地視察から得られた経験と外国語学習の有意義な連携方法を提案したい。

2. 経緯

山口県立大学はアメリカ国内では20年以上、ケンタッキー州にある私立大学と交換留学の制度を続けていたが、経済状況の変化により2023年度の終わりになって制度の維持が難しい旨の連絡があり、2024年度に交換留学の関係を終えることになった。ただし、国際文化学部、特に国際文化学科にはアメリカへの留学を希望する学生が一定数いるため、新たな留学先の大学を早急にアメリカ国内で確保したいと強く思っていた。

留学先の選定には具体的には3つ条件があった。まず生活費を含め、本学の一般的な学生にも手が届く範囲の金銭的負担で10か月程度の長期留学ができること。次に専門分野と教育方法の点で本学の学生に合う内容の大学であること。最後に本学の事情を直接伝えられる専任の教職員が先方にいることである。

最初のコストの問題は深刻である。円安が続く中、経済的理由で長期留学を断念する学生が続いており、ブランクを空けず本学部の特色である留学制度を維持させるため、相手先の大学は私学よりも公立大学が望ましい。次の分野の選定は個別に大学の中身を見てみないと分からない。大規模な総合大学で、どの分野も揃っているから大丈夫という保証がないのである。アメリカの大規模大学は研究重視で、大学や学部のレベルでは間口が広くても、個々の分野では専門化が進み、選択の範囲が狭くなることが多い。最後の条件は簡単に言うとコネがあるということだが、これは海外との交流で極めて大事である。現地に1人知人がいるだけで、その土地の生活はずっとスムーズになる。学生を送るうえで安心と安全に代わる価値観はないが、それも信頼できる知人が1人いてくれるだけで極めて大きくなる。

そこでフロリダ州の州立大学の西フロリダ大学(the University of West Florida)が新たな留学先の候補として浮上した。フロリダ州西部、アラバマ州に近いペンサコーラに位置し、メキシコ湾に面した古くからの街の近郊にある。在学生は14,000人強だが、半数はオンライン受講の学生なので、キャンパスに通う学生数では

アメリカの州立大学として小規模である。比較すると、同じ州内のフロリダ大学(Gainesville)、南フロリダ大学(Tampa)は、ともに州立大学で、それぞれ学部と院を合わせた在学生が50,000人以上いる大規模校である。

昨年度末から比較的短期間で西フロリダ大学を新たな候補に絞り込むことができた。これは本学部のAmy Wilson教授が後で紹介する西フロリダ大学のRandolph Scott氏と山本亜希子氏と親交があり、本学との提携関係をお勧めいただいたことが大きい。ここに記して、Wilson教授の献身的な努力に謝意を表したい。また私が進めていた研究が昨年度末にアメリカ語用論学会の第6回国際大会(the 6th International Conference of the American Pragmatics Association)に採択され、会場が2024年9月に南フロリダ大学ということも縁があった。そこで令和6年度山口県立大学研究創作活動助成（教育改革型）を受け、私は国際学会での研究発表と西フロリダ大学の視察を兼ねてフロリダ州に出張することにした。田中学長をはじめ、研究創作活動助成の審査にあたった方々にも深く感謝したい。

3. 西フロリダ大学の環境

私はシカゴ経由で9月24日にペンサコーラに入り、西フロリダ大学近くのホテルに宿泊した。当初、26日の夜に学会参加のため、Tampaに飛ぶ予定だったが、25日からフロリダ州にハリケーンが接近し、Tampaの空港が閉鎖されたため、ペンサコーラに1泊追加して、27日にTampaに移動した。25日に西フロリダ大学の関係者と会談し、26日は大学が休校になったため、大学周辺を案内してもらい、ペンサコーラの環境の理解に努めた。結果として時間に余裕が生まれ、西フロリダ大学の教育内容、専門分野、学習レベル、学内施設、現地の生活環境を総合的に視察することができた。出張中、州内ではハリケーンの被害があったが、私自身は雨に降られることもほとんどなかった。

ただし、南フロリダ大学で対面開催の予定だったアメリカ語用論学会は急遽、オンライン開催に変更され、私は現地にいながら、かつ当日は曇りで悪天候ではなかったが、ホテルから発表した。アメリカで国内移動が出来なかった参加者がいたため、公平の観点から全面的にオンライン開催になったわけである。ハリケーンはフロリダ州に関わるうえでのリスクと心得ておいた方が良いと思われる。

ペンサコーラはメキシコ湾岸に位置し、アメリカ海軍の航空隊基地の拠点として知られている。実際、街中で海兵に会うことも多い。歴史的にはアメリカ最古の都市であり、メイフラワー号が今のマサチューセッツ州に着いた1620年より前、1559年にはスペイン人の入植が始まっている。ただ、北部の1776年から始まる独立13州とは違い、フロリダはいつからアメリカ合衆国かという問題があり、南北戦争でアメリカ連合国が終わった1865年からフロリダのアメリカ合衆国が始まると言って良い。

ペンサコーラには“the City of Five Flags”と言って「5つの旗の街」という異名がある。これはペンサコーラを支配した5か国を順に並べたもので、スペイン、フランス、イギリス、アメリカ連合国、アメリカ合衆国を指す。もっとも正確には5か国が入れ替わり支配して、その時の本国の支配者が違うため、5か国がスト

歴史的建築の見学

Scott氏との食事。Scott氏はエビのシチュー、私はエビのフライのサンドイッチ。エビやカキなどの海産物の食事が名物。

レートに並ぶわけではない。海岸沿いに最初のスペイン人居留地の跡が再現されており、地名と共にスペイン的な印象が強い。

海岸近くの歴史的街区には古い住宅や教会を再建してあり、ペンサコーラの昔の生活を再現して見せてくれる。

大学から車で20分ほどで砂浜に出る。真白な砂にエメラルドグリーンの海面は世界屈指のオーシャンビューである。ただし、この絶景はハリケーンの産物でもある。

西フロリダ大学では国際交流担当のRandolph Scott氏と山本亜希子氏に主に案内していただいた。Scott氏は20年ほど前、ご自身がケンタッキー州のセンター大学に在籍時、交換留学生として本学に滞在したことがあり、当時の学生部長の赤羽潔教授（社会福祉学部）に教わっていた。今は西フロリダ大学で留学プログラムに従事され、本学との連携にも熱心に取り組んでおられる。山本氏は防府市出身の方で文科省や山口大学の国際交流のお仕事を経て、西フロリダ大学で日本語を教えておられる。本学や山口県に縁のある方々とアメリカで交流でき、本学の留学制度の新規巻き直しも実現でき、こういうことを英語でserendipityと言うと実感する。

西フロリダ大学ではGreg Tomso副学長、Rachel Hendrix国際交流部長とも会談し、ともに本学との連携に前向きな方針を確認した。Tomso副学長は19世紀アメリカ文学がご専攻で、国際交流のほか、入試、授業、学生支援、スポーツ等の学生活動を担当されており、日本で言う教学部門の総括である。また、Tomso副学長は東アジアの陶器、日本茶、中国茶に造詣が深く、Scott氏、山本氏および先方の学生と共に来年5月に本学を訪問される予定である。

国際交流のスタッフと、左端が山本氏

左端がHendrix部長

4. 西フロリダ大学の教育内容

西フロリダ大学は学部構成では理工系と経営学が大きく、特に経営学(MBA)で全米のランクが高い認証を受けている。その一方、人文社会系に加え、芸術、教育、看護といった専門分野がある点で本学と類似している。地域に開かれた大学を謳う点でも本学と共通する。

西フロリダ大学図書館

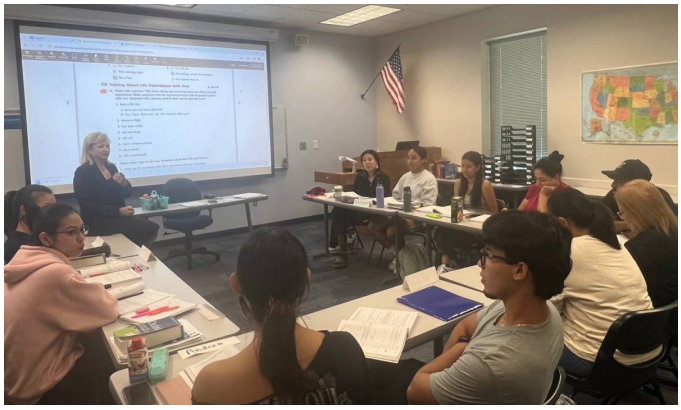
西フロリダ大学の講義室

留学生は留学生用の英語の授業に始まり、人社系の学部科目も受講可能である。中国系、ヒスパニック系、東欧系など、非英語圏からの学生も多く、英文法の初歩から入る授業もある。Hendrix部長、Scott氏、山本氏に加え、Jessica Prather氏、Brenda Groat氏、Sara Brake氏、Olga Batova氏、Olivia Gardner氏らの国際交流のスタッフと懇談し、西フロリダ大学の教育重視の授業方針をお聞きした。詳しくは以下のサイトを参照。

https://uwf.edu/academic-engagement-and-student-affairs/departments/international-affairs/about-us/meet-the-staff/

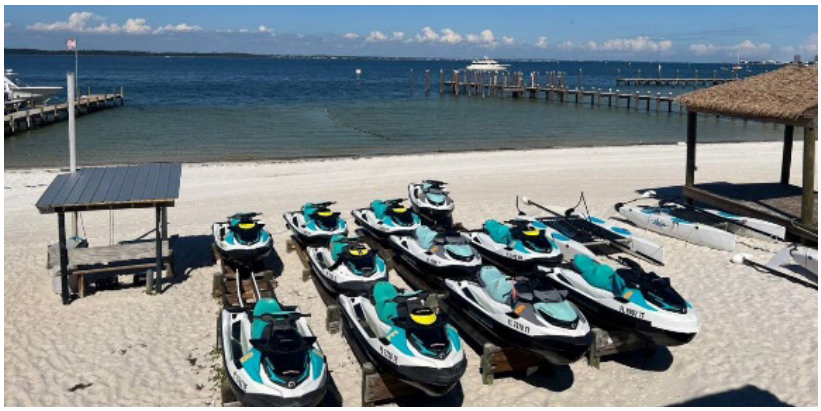
学内にはJapan Houseと呼ばれる建物があり、中には畳の部屋に着物や日本茶の道具が揃えてある。最初は日本人からの寄付で建てられた施設とのこと。ここで日本文化に関連する授業等が行われており、日本への関心の高さが伺える。

西フロリダ大学の日本館


留学生向けの英語の授業

学内に寮、食堂、運動施設があり、基本的な生活は学内でできるようになっている。

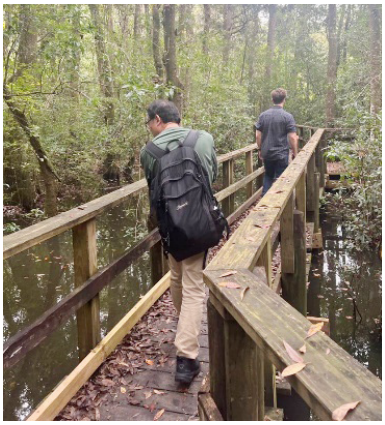
学食の食事。揚げ物が多いが、
サラダも十分に食べられる。


マリンスポーツも盛ん

アメリカの大学にはよくあることで、大学が市街地から離れたところにあるため、普通に徒歩で動ける範囲にはスーパー等の買い物ができる店がない。寮は相部屋の人数や台所の完備の度合い（共有か個人用か）で区分されており、費用も違う。

生活面で注意することでは、多様な人々が暮らしており、大麻(marijuana)が蔓延しているところもあるという。特有の臭いがするので、近くで吸っている人がいれば、見えなくてもすぐに分かると聞いた。さらに今のアメリカの政情を反映し、政治的対立が先鋭化する土地でもある。食事会の際にチラリと聞いた話では、ファシストがいるとのこと。留学生が直接関わることは少ないと思うが、アメリカでは学生の政治意識が高いので、身近に論争が起こることもありえる。そういう場合も事実をよく観察して、穏健に対応してほしい。

学内は多くの樹木と湿地に恵まれ、池にはカメやワニも生息している。



学内の森

学内の池

ペンサコーラは公共交通機関が限られており、車がないと移動には不便である。そのため、留学生は学生間で車に乗せてもらい、買い物やレジャーに出ている。

私が接した範囲に限られるが、西フロリダの人々の英語は標準的で聞き取りやすい。この豊かな自然環境で本学の学生が留学体験を送ることができるように制度設計を進めたい。

5. 英語教育への還元

今回の西フロリダ大学の視察と国際学会参加から得られた知見が大きく2つある。1つ目は留学の効果である。外国語学習では留学は目標ではないが、動機ではある。また、留学中の海外経験よりも帰国後の振り返りの方が学習としては大事だと思われる。

文化は現地で身につく。音楽の地域性を例に挙げよう。当然ながら、音楽は空気と共にある。食堂やショッピングセンターでかかっている音楽が、その土地に根差しているわけである。日本にいるかぎり、カントリーとウェスタンの違いが正直、よく分からない。フロリダではカントリーが人気で、地域的にウェスタンではない。

極めて簡略化すると、Dolly Partonはカントリーの歌手で、John Denverはウェスタンである。私はDolly Partonで思い出したのが歌の*Jolene*だった。それでScott氏と車内で話が続けられた。ウェスタンの特徴は歌詞に独特のストーリーがあるとのこと。

食事、服装、スポーツの応援チームなど、各地域で違うものは多くある。どれも日本にいて分かるものではない。季節の天気と、それに応じた生活慣習も各地域で違う。Tomso副学長から教わったことで、フロリダではハリケーンは良い言い訳(good excuse)になる。会議に出席できなかった、余計な出費がかかった、耐用年数が短かったなど、予定通りに行かなかったことは総じて「あの時はハリケーンだったからなあ」として説得力がある。実際、ハリケーンには、それだけの威力があり、定期的にやってくるのである。

このような現地でしか得られない知見は、現地にいる間よりも帰国して自文化との違いを認識してからの

方が理解が深まる。海外は「行ってガックリ、見てガッカリ」ということも実際にある。ただし、それは自分の世界が広くなったことの証で価値がある。

2つ目は異文化を通じた相手との話の合わせ方である。従来のアコモデーション（同調）理論では（Giles 2016）、子供を相手に話す場合は「お馬さん」のように子供らしい語彙を選び、北九州が地元の相手には「そうっちゃ」などの北九州方言で返答するように、自分の発音、語彙、文法といった言語的特徴を相手の話し方に合わせることで、相手との心理的距離を近くするという事例が扱われてきた。これを応用し、話題を相手の文化圏のものに合わせることで相手との距離を近くするという文化的アコモデーションの理論が開発できる。

この2つの知見を結びつけることで、海外で得た経験を高いレベルの語学力に変換することができる。以下、要約的に提案したい。

アメリカ語用論学会では過去に3回発表しており（Nishida 2014, 2018, 2022）、その度に語用論研究に最新の知見を受け、自分の研究を伸ばすことができた。ただし、過去3回の発表では、いずれもGrice 1975の語用論的原則を、そのまま適用して説明を試みてきたが、今回の発表では語用論的原則を組み合わせ、編集してから適用するというように説明方法を変更した。これは英語を題材にしつつも、定型表現からパロディを作る方法を通言語的に一般化して導く試みであり、文化的なコミュニティでことばを楽しむ場合に不可欠な条件を明らかにするものである。

Brown and Levinson 1987が指摘するように、天気は相手と最も合わせやすい話題とされる。しかし、天気は地域ごとに特徴が違うので、全員が同じように反応できるわけではない。むしろ、各地の天候の話題から、どのように自分の話を相手に合わせていかれるかという問題を設定するべきである。ここでは、自分が知らない天候の話でも、まず相手から話を聞き、相手の話の引用を自分で編集するというステップが不可欠である。

2018年の学習指導要領で高校の英語では統合的言語学習として複数の言語技能の有機的な連携が求められている。聞いたことについて書いたり、読んだことについて話したりするように複数の技能を入れた言語活動が統合的とされており、しばしばディベートやプレゼンテーションが例示されるが、このような言語活動はパフォーマンス自体が統合的であって、何が統合的言語技能かという根本的な問題は解明されておらず、高等教育での実践も不十分である。この問題を解く鍵が、各文化圏に固有な音楽や天候に関する慣習等の文化的アコモデーションから与えられる。これは端的に他者のことばの引用という形式に表される。言い換えると、自分の経験を振り返り、他者から教わったことを自分のことばでまとめることが外国語学習の１つのゴールに位置づけられるということである。

他者の発言を聞き、または読んだ後に自分のことばに入れるという意味で、引用は統合的言語活動に該当する。歌は歌詞をそのまま再現することが基本であり、引用の端的な例である。先に言及した*Jolene*では、“I’m begging of you please don’t take my man. Jolene, Jolene, Jolene, Jolene. Please don’t take him just because you can.”というサビが歌えるだけでも正確な引用であり、この歌を知る人と話を合わせるのに効果的である。さらに、名前の繰り返しのところを別の名前に代えるだけで、パロディの替え歌ができるという楽しみ方もある。

しかし、引用の効果的用法は日本の英語教育に欠けており、ましてや他者の発言や定型表現を部分的に入れ替えたパロディは学習範囲に収められていない。その結果、口頭発表やスピーチでも、卒論やレポートでも、英語の発音や文法は上達しても、レトリックとしての演出は拙いままである。ユーモアもない。

アメリカ語用論学会での私の発表（Nishida 2024）は、この課題を解決するべく、英語の論説と演説における引用とパロディの用法を調査し、その効果的な用法を専門課程の英語教材に組み入れることを目的としていた。最初に、リンカーン大統領の演説など、よく引用されパロディ化も多い定型表現を選び出す。ヒット曲の歌詞や有名人の発言など、理解に文化的背景が必要な表現にも着目する。次に、元の表現が生じた状況と引用される状況を比較し、引用の効果として、ユーモアや皮肉を含め、話し手と聞き手の文化的共通基盤が強化され、ことばを楽しむ相互理解が生まれることを示した。

この研究は語用論の理論的考察に終わらず、パロディを通じたユーモアの仕組みを明らかにすることで言語教育やコミュニケーション一般にも関わる射程の大きさを有している。具体的には、引用とパロディに関わる統合的言語技能は以下の3種類に集約される。

（1）詩的に形式を整えよ。
（2）編集せよ。
（3）アイデンティティを表現せよ。

（1）と（2）はともに表現形式に関わるが、方向が違う。（1）は表現の足し算に関わり、（2）は与えられたスペースに収めるべく、引き算的に働く。（3）は、話し手の関心、所属、主張を伝える内容とするように、ことばの内容を扱う技能で、内容言語統合型学習（CLIL）と連携している。この発表に関連して、日本語用論学会（大阪大学）でも発表した（西田 2024）。

文章作成の要点は長く詳しく書くだけではない。詩的に短く分かりやすく表現することは、特にタイトルや自分の主張を表すところでは大事である。こういうところを長く詳しく書くと却って伝わらなくなる。

学部の専門課程の外国語学習には文化的アコモデーションの対象としてエンターテインメントも含め、（1），（2），（3）を踏まえた次のような内容が取り入れられるべきである。

Ⅰ．詩などの韻文に親しむ。脚韻と頭韻など英文学の詩の基礎を押さえたうえで、韻文の特徴を入れた歌詞を理解し、自分で歌えるようにする。平行的な形式の表現を反復させることの効果をジャンルごとに学ぶ。
Ⅱ．パロディの作り方と使い方を理解する。限られたスペースで効果的な表現とするべく、部分的な入れ替えの方法を習得し、元の表現の何を残し、何をどこまで入れ替えるとパロディとして認められるか、前提と焦点の区分を応用して明らかにする。あわせて盗作や無断転載の禁止といった著作権上のルールも学ぶ。
Ⅲ．海外の文化的アイデンティを知るべく、ジョーク等のお笑いに触れる。なぞなぞをはじめ、ことば遊びの仕組みを理解する。CEFRでは笑いなど、ことばの楽しみはC1という上から2番目の高いレベルに位置し、外国語学習の難関である。前提となる知識の範囲に対応させ、笑いが理解しやすい素材を選ぶ。

「詩的に形式を整えよ、編集せよ、アイデンティティを表現せよ」の3種類の統合的言語技能は「話す、聞く、読む、書く」という基本的4技能では足りないところを補うものである。これからも「アカデミック英語Ⅲ、Ⅳ」をはじめとする私の授業で、この方法を実践していく。

6. 結語

本研究の目的は大きく3つある。1つ目は統合的言語技能を国際的行動力に結びつけられるように、西フロリダ大学に新たな留学先の環境を整備することである。2つ目は引用やパロディの語用論的研究から文化的アコモデーションの新理論を開発し、コミュニティでことばを楽しむ仕組みを解明することである。3つ目は文化的アコモデーションを実践するべく、統合的言語技能を育成する英語教材を試作し、学生が英語の素材を鑑賞するとともに、スピーチやエッセイの実作を通じて英語を楽しむ機会を提供することである。

留学で得た経験を高度な外国語の運用力に変えるには、留学で終わらず、帰国後に経験をことばにまとめるプロセスが欠かせない。これが行動力と語学力の連携である。本研究は引用に関する言語学的研究を基に、外国語学習のモデルを実践的に示し、グローバルコミュニケーターとして学生が自己実現できる環境を整備することを目的としている。

謝辞

本研究は、令和６年度山口県立大学研究創作活動助成（教育改革型）を受けたものです。本稿に関連し、著者に開示すべき利益相反はありません。

参考文献

Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage,* Cambridge University Press, Cambridge.

Giles, Howard (ed.) (2016) *Communication Accommodation Theory: Negotiating Personal Relationships and Social Identities across Contexts*, Cambridge: Cambridge University Press.

Grice, Paul (1975) Logic and conversation. In Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Act*s, 41-58. New York: Academic Press.

Nishida, Koichi (2024) "The roles of common ground and Gricean maxims in parodies," the 6th International Conference of American Pragmatics Association (AMPRA-6), 2024年9月28日, the University of South Florida in St. Petersburg, Florida.

Nishida, Koichi (2022) "Two types of proverbs and the floor holder's self-expression," the 5th International Conference of the American Pragmatics Association (AMPRA-5), 2022年11月4日, the University of South Carolina in Columbia, South Carolina.

Nishida, Koichi (2018) "Proverbs as proforms of evaluative utterances," the 4th International Conference of the American Pragmatics Association (AMPRA-4), 2018年11月1日, University at Albany, State University of New York, New York.

Nishida, Koichi (2014) "Accessibility and the reader-oriented use of English pronouns," the 2nd International Conference of the American Pragmatics Association (AMPRA-2), 2014年10月18日, University of California, Los Angeles, California.

西田光一 (2024)「発話の方略の動的対立と逸脱」ワークショップ「デフォルトからの逸脱―動的語用論から―」日本語用論学会, 2024年11月30日，大阪大学.